

『日本教育新聞』一九六九年四月八日（日本教育新聞社）

時の  
話題



## 昭和戦国

矢口 新

大学騒動のなかで教授や学生の行動を見ていると、両者に共通の欠陥があるようである。あらわれ方は異なっているが、共に話し合いの習性をもっていないことである。ともにわが身を反省する習性をもっていないことである。このことはこれまでのわが国の民主主義路線のあり方の根本問題を暗示するものであり教育のあり方も根本的に反省するものではないか。

ゲバ棒の学生が暴力によって教授連中をつるしあげるのはいかにも無茶苦茶であるが、教授の方もつるしあげられっぱなしというのは情けない話である。対話不在などというわれるが、確かに対話できない人種であるらしい。学生もあれだけ熱心に集団をくんで団交を要求しているのであるから、教授の方も集団をつくって交渉したらよいではないか。そういうことが大人げないことだというの

なら、大学の崩壊はそこに原因していると言わなくてはなるまい。

企業のような、大学よりははるかに利益社会的な社会でも、企業の崩壊という事態の前に休戦をして協力して再建をはかるのである。まして学問真理の追究をあれほど強調され、大学の自信をあれほど主張される大学教授が、現在の危機を乗り切るのにあらゆる努力を払って話し合いを実現することをしてもよいのではないか。ぼう然として学生の行動になすすべを知らないのでは、いかにも論語読みの論語知らずではないか。

そういう教育者に育てられた学生が、話し合いの実践ができないのもまた当然だといえるかも知れない。

つまり習性として民主主義ができあがっていないのである。それは毎日の教育の中、学習の中にある。教授が一方的に講義をし、

学生が一方的に話すだけで、どうして話し合いの習性が身につくであろうか。そんなことでどうして学問の道を共に追求する共同態などと言えるであろうか。始めから出なおす必要があるのである。大学の改革とは、教育の場における教授と学生の日常のありかたをかえることなのだ。毎日の生活で真剣勝負が行われることである。しかし現在の大衆学生にそれだけの充実感を与える教育をするとなると、これはもう、一人一人の教授の職人芸の問題ではなくなる。制度や設備の根本的な充実の問題であろう。

百年一日の如き体制の上にあぐらをかいて、昭和元祿などといっているのでは、若い者に圧倒されてしまうのである。元祿ではなくもう戦国の様相だ。戦国の特色は下剋上であった。下剋上とは現代語でいえば能力主義であり、若がりである。世の中はまさにそれを必須としている。それは真剣勝負ということだ。教育界だけが、恰も家元の権威と秘伝の口授の如き古臭い形式を保っておれないのは当然である。近代化に早くふみ切ってほしい。

（能力開発工学センター常務理事）